

る。運営側には、避難者が支援に対して依存的になっているとの懸念があった。「いつまでも外部支援に頼ってはいられない」という考えがあり、外部支援者である我々もその考えを理解し、過剰な支援を行うことなく自立支援を行っていく必要がある。

【避難所の生活状況】

日中はほとんどの方が、仕事や家の片づけなどで不在である。また子供は学校に行っており、夕方まで静かで落ち着いている。避難所に残るのは数名だが、高齢の方も早朝から自宅に戻って用事を済ませたり、珠洲中心部に買い物や受診、入浴に出かけるなど、一定の生活リズムで適度の活動を行っている。

子供達は、学校の日課の一つとなった9時のラジオ体操を教員とともに体育館に来て、避難者、支援者とともにやっている。ラジオ体操の後は天気がよければ校庭で、悪ければ体育館の中で大縄跳びをして体を動かしている。下校後は避難所に戻ってきて、ストーブ周辺に集まってオンラインゲームをしたり、避難所に避難している教員とトランプに興じるなど楽しい時間を過ごしている。避難所は、起床時間、消灯時間が決まっており生活リズムは整っている。

食事は自衛隊による炊き出しの他、支援物資や地元野菜などを活用して避難者による調理・配膳が行われている。また、不定期でさまざまな支援団体による炊き出しの提供があり、食生活は比較的充実している。支援団体による炊き出しの際は、地区全体に声をかけておりランチタイムには20～30人の在宅避難者の方が一堂に会し、にぎやかに食事をしながら近況を確かめ合ったりしていた。

ライフラインの復旧については前回報告分と大きく変わらないが、3月3日から自衛隊給水車による給水が実施されるようになった。このことにより、毎日山水を500リットルほど汲みに行き、貯水タンクに移すという作業がなくなり運営側の負担がかなり軽減した。また、給水量が確保できたことで、学校の1部の水洗トイレの使用が可能になったことや、洗濯が自由にできるようになった。同時に水洗式の仮設トイレが設置されたことで災害用トイレ袋による排泄量が減り、廃棄物の減量につながっている。

避難所内の娯楽や楽しい行事があまりない状況であったが、炊き出しの団体がカイロプラクティックの施術を提供したり、シンガーソングライターによる楽曲の提供があり、避難者の方々は手をたたいて歌ったりして楽しむ様子が見られた。また3月3日の雛祭りの日は、看護師が折り紙でお雛飾りを手作りし、女の子にプレゼントすると笑顔が見られた。

5．支援活動の実際

【被災者への生活支援と健康支援】

生活支援として、避難者の衣・食・住の充足を目指した自治運営のサポートを以下のように実施した。

3月12日に当避難所である体育館で小中学校の卒業証書授与式が開催予定である。体育館使用に伴い体育館の舞台側半分のスペースを確保する必要があり、3月2日、3日の2日間で大幅なレイアウト変更が実施された。ゾーニングは管理者と救護班で協議して行ったが、このタイミングで男女別のゾーニングを提案し、おおむね実現された。しかし、スペースを空けるためにベッドを寄せて配置した結果、ベッド間隔が狭くなった。このため、感染防止上の観点から衝立をこれまで以上に設置した。衝立を増やしたことは感染防止策とプライバシーの確保の両方の効果が期待でき、特に女性の避難者には喜ばれた。

また避難者には、被災地で大変な状況であっても卒業式はいつも通りに開催してあげたいという気持ちがあり、ベッドや荷物の移動、清掃などは避難者からも参加しみんなで協力して行っていた。子供を大切にし、一人ひとりと家族のような関わりを持っている土地柄である。地域住人あげて卒業生を送り出すという大切な行事を、できるだけ平時と同じようにやりたいと考えるのは当然である。

卒業生だけでなく、春休みに入ると新学期に向けて生活の基盤を被災地域外に移すために転校が決まっている子供もいる。被災に加えて転校は、子供にとってストレスを増強させる因子である。子供なりに被災したことを受容し保護者や地域の大人が頑張っている状況も理解していると推察される。学校ではカウンセラーの介入によるメンタルケアも実施されており、気持ちを吐露できる場もある。災害により想像もしなかった方向に変化していく環境の中で、子供が自分の気持ちを整理していく過程を見守っていく必要がある。

地域の在宅避難者のうち要支援者への支援は地域全体のニーズ調査からケース毎の対応にシフトしてきている。避難所管理者から気になる避難者の個別の訪問依頼があった際に、保健師チームと情報共有し支援につながったケースがあった。また従前より要支援者としてリストアップされ保健師チームやJRAT（日本災害リハビリテーション支援協会）が継続的に関わっている在宅避難者の方の情報も保健師チームからの情報提供があり、避難所管理者と救護班で共有した。さらに二次避難先から自宅に帰還している在宅避難者の個別事例について、珠洲市保健医療福祉調整本部より問い合わせがあったため、避難所管理者から情報を収集し提供した。

健康支援として、降圧剤内服者の内服や血圧測定の自己管理のサポートや、感染管理上必要な清掃、消毒、換気などの環境調整を実施した。2月末に1名のインフルエンザ罹患者が発生し、小学生を中心に次々と感染が拡大していった。発熱者をインフルエンザ疑いとして隔離するなどの対応を行ったが、避難所で生活する子供達は常時密接に過ごしており、感染拡大にはそのことが影響していたと推察される。幸い全員が重症化せず、3月6日にすべて隔離解除となった。隔離中の子供の状況について、学校側と保護者には日々の状況を共有するとともに、登校再開となった場合は留意点を伝えた。また、休憩時間やラジオ体操の時の様子などを観察するなど、保護者や学校と連携した健康管理に努めた。

【復興に向けた想いと自立支援】

防災から2か月以上が経過したが、いまだライフラインの復旧もままならない状況である。避難者の方々と何気ない会話の中で「仮設（住宅）も建ってないのに二次避難が終了する。みんな、どうするんだろう。ここ（避難所）にまた帰ってくるのかな。」「いつからどうなるって、もう少し先のことの目途が立てば不安も少なくなるのに。」と気持ちを吐露されることがあった。珠洲市中心部の方から仮設住宅の入居が始まり、被災地全体は少しずつ前に進んできているが、不確定な将来に対する不安を抱きながら懸命に今日を生きている。

高齢・過疎の課題はそのまま被災者が仮設住宅や恒久的な住宅に移る際の課題となる。避難所管理者によると、山間部に在宅避難している高齢者は罹災証明の申請すらできていない人もいるようである。

今後、二次避難先から戻って来る避難者の方も多く、避難所内はまた過密な環境となることが予測される。長期的な生活ニーズと健康ニーズ、コミュニティ形成に焦点をあて、自立支援を行っていく必要がある。また、避難所だけでなく地域全体の要支援者に目を向け、個別のニーズに応じた支援を継続する必要がある。

6．支援活動を通しての課題

- 1．支援者に依存しない避難所運営や個々の自立した生活に移行できるよう、運営スタッフや避難者とともに考える必要がある。
- 2．長期化する避難生活で蓄積する心身のストレス、二次避難や子供の卒業、転校などのリロケーション

によるストレスを予測し対応する必要がある。

3．2次避難者の帰還で増大すると予測される生活ニーズ、健康ニーズへの対応を運営スタッフとともに考える必要がある。

4．在宅避難者の個別のニーズに他機関、他職種と連携して対応する必要がある。

以上

参考：活動の様子



写真1 レイアウト変更の様子



写真2 シンガーソングライターと歌っている様子
歌手の方には、撮影と学会ホームページ掲載の許諾を得ている



写真3 JDATによる義歯調整の様子



写真4 横断幕に寄せ書きする様子

避難者の方およびJDATの活動員には、撮影と学会ホームページ掲載の許諾を得ている